續文獻通考

卷二十六

江苏工业学院图书馆
藏书章

鏡花全集　巻十六　第十六回配本（全二十九巻）

定價二千二百圓

昭和十七年四月二十日　第一刷發行
昭和五十年二月　三日　第二刷發行

著者　泉鏡太郎

發行者　岩波雄二郎

發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉　名月　1975

目次

紅葛（大正三年十二月）……一
櫻心中（大正四年一月）……六九
櫻貝（大正四年一月）……一三
新通夜物語（大正四年四月）……一六三
星の歌舞伎（大正四年五月）……二四七
夕顔（大正四年六月）……四二九
蒔繪もの（大正四年七月）……四六一
懸香（大正四年九月）……四七五

白金之繪圖（大正五年一月）……五三
浮舟（大正五年四月）……五七五
柏奇譚（大正五年五月）……六一九
人魚の祠（大正五年七月）……六六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

紅

葛

一

「はつ、何だ、何だ。」

と、怯えて、運轉手は忽ち自動車を飜然と下りると、崖路の暗闇の中を一筋眞蒼に流した、もの凄い光に射られながら、慌しく背後を透かした。

其處へ、恰も大地獄から、硫黄の煙で吹上げられた、幽靈のやうに、ふら〳〵と顯れた肩のさみしい影がある。

崖に生えた雜樹の根に、ぶら下りでもしたかと思ふ、腰はふら付くが、ひた〳〵と忙しい跫音、路を上りざまに駈寄つた。

「何だ、何か用か、何ですか。」

「助けて下さい。」

然矣、此の聲の爲に、夜の箱根を唯一人乘つて打つ車中の婦人が、電光よりも眞白な指で、激しく硝子越に其の運轉手の背を敲いて、車の進行を停めたのであつた。

「助けて。」――

と云ふ聲よりも、婦人は彼を挽倒したと思つたらう。……黒雲低き片岨の樹の根から、鳥が立つやうに衝と出て、殆ど自動車に縋着かうとしたのであるから。……云ふまでもなく颯と切る轍とともに、其の影は、恰もものの怪の消ゆるが如く取殘されて背後に消えたが。

「馬鹿野郎！」

運轉手は、峰から哄と、石も雨も卷いて落す風と一所に、罵る聲を投げ飛ばして、一捻り昂然と胸を反らしつゝ駈出す端を、强く窓を打つて引留めたのであつた。……

「願ひます。」

と切呼吸で、聲もやゝ震へたが、其の風體は、と見ると、縞柄は分らない、何處のか旅宿の貸廣袖らしいのに、青い浴衣を襲ねたのが、跣足で居る。

運轉手は一目見ると、

「何、何を助けろだい。」ともう一息、急込んだのは無理もない。

が丁どその時、上り坂を崖へ寄つた、左の窓が、音もしないでスッと下りた。此の窓の開いたのは、眞黒な大な巖が、四角な眼を睜いた風情である。そして、其處から覗いたのは、半輪の月かと思ふ、細面に鼻筋の透つたのが、薄いショオルを深々と掛けて、俯向く狀に、頤を襟に埋め

た若い婦人。トきらりと電光が閃いて射て消えたのに、悽然とするほど美しい。
鈴を振るやうな聲で、
「何うなすつたんです。」
「御婦人。」
と唯呼ぶ途端に、巓を破る雷の響。
これが四つ五つめの激しいのであつた。
霜月の二十日前後、山は早や錦葉と云ふのに、――谿河に架けた橋に近い湯宿に居ても、雷の嫌ひなのが、あの、ごろ〳〵と陰に響く車の音を、餘り氣にしないで可いくらゐ、箱根は夏も雷鳴が少いと云ふのに、――其の夜は雨に風さへ激しく、殆ど天變であつたと云ふ。
天變と云へば、人妖に庶幾かつたらう。……國府津の會社が自動車をはじめてから、こんな時間に、若い女客の唯一人は。……
「宮の下まで。」――
まだしも湯本と云へば近いのに。

二

會社員が恭々しく、其の時、

「御一名？」と聞くと、

「はあ。」

一寸したバッグを持つたなりで、其の美しいのが誰も居ず、すらりと行む。

――いなさ參らう――と云ふ――古釘で祝ひましよ、と答ふる。手石浦の物語を思出す。……風もいなさの、時ならず生暖く、折から大粒なのが、ぽつ〳〵と來た頃であつた。……沖には難破船でもありさうな、波は白く、樹は黑く、風の中空に嚙合ふ時。

薄紅梅の地に一重櫻の咲亂れた長襦袢の褄を、と捌いたと見ると、自動車の裡に姿を消した。

此處からは五里あらう、箱根峠の眞中へ雨を切つて、黑雲に乘つて行く……と思ふと、旅客に馴れた停車場の驛員等も、怪しい音と凄い燈の、唸を生して、並木へ飛ぶのを、風に吹かれて見送つた。

剩へ、夜目に莫大な海月の泳ぐ、暴風雨の山の、峰と峰とが、頂きの石を摺り合せて、火を切る如く、チカ〳〵と電光が頻であるから。

小田原はまだ宵だつたが、生蕎麥の行燈も、廓の電燈も、町の柳も、白壁も、たゞ波の如く搖るゝ中を、鐵の船に車輪の舞ふ通魔が、と軋つて通つて、風祭から湯本に行く間、渦卷く黑雲の

雙子を前途に、太閤の一夜城が高く鯨の背を浮かせて、海が一枚、青く颯と飜るのが窓に映るとともに、はじめて雷が轟いたのであつた。——

「助けて下さい。」……

其の事の起つたのは、塔の澤に、早や遠く、大平臺もまだ遙な、上りの半途の、崖の樹の根の、破簾のやうな中だつた。

「何うなさいました。」

「貴女、貴女。」

婦人は、其の若造の怪しい風采を視て、一寸言葉を途切らした。が、電光の又閃めく影に、沈んだ落着いた樣子である。

運轉手は腕を組んで、斜に肩を聳かした。

「お見掛け申してお願があります。」

「何うなさいましたの？」

「お車へ乘せて下さい。」

と、差寄せて面を上げた時、其の若造を熟と視る……婦人の瞳は大きかつたが、

「お乘んなさいまし。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「御免を！」

と忽ち威勢よく、

「お差支へございませんか？」

と猶豫ひつゝ戸を開く、運轉手の注意には答へないで、

「宮の下へ行くんです、構ひませんか。」と婦人が言つた。

「えゝ、何處へでも、地獄へでも。」

山中には人も知つた、大湧谷、小湧谷、硫黄の地獄の名どころがある。其があるからまだしもであらう。婦人の面影が車の裡へ隱れるに連れて、若造の頭は斛斗返る如く、足を宙に飛込むのを見て、激しい雷鳴とともに、運轉手は、フツと唾吐く如く禁厭の息を風のまゝに吹散らした。

「此方へお掛けなさいましな。」

若造が進路を逆に、向うの隅へ小さく成るのを見て、婦人は姿を細うしつゝ、颯と薫る其の片袖を敎へたのであつた。

「決して、何うぞ。」

「否、一人だと腰が浮いて跳上げられさうで危くツて不可いの、丁ど可いのよ。」

と言葉も解けつゝ、

「附着いて居て頂戴。」
と聲も涼く云ふ。
運轉手は、直ちに把手に手を掛けた。峰と峰とが谺を籠めて、風雨に雷火を取交はす。……輝く草樹は白き骨の縺るゝ如く、谿川の暗闇に血の走る、暴風雨の山を、晉なき、大車輪は軋り行く。
やがて、燈火の店を開け連ねた、路傍に、籬に、軒に、紅い花を選つて植た、大平臺を駈拔ける時は、ダリヤ、サルビヤの流るゝ紅が赫と照つて、珊瑚の枝の亂るゝ中へ、藍碧の雨の潮の如く注ぐを視た。

三

「其の男は何うしたい。」
「まあ、其の人には、私ども吃驚いてしまひましてございますよ。……御前……自動車が入りましたから、此方様がお着き遊ばしたと存じまして、……」
宮の下、新屋の女中、お民と云ふ、銀杏返しの膨りした、中年增が、敷居越に膝を支いて、(此方様。)と云ふ。……箱根の夜道も旅である。……若い婦人は、廻縁を硝子戸で取廻した廣室の眞

中に置いた卓子の前に、金茶の地に、花白く蔓青く、葉を黒で鐵扇葛を刺繍した、恰も燻んだ黄金に、銀と烏金で象嵌をしたやうに見える、幽に輝く丸帶を、薄く、太鼓に締めた細腰。絹蒲團に無造作に預けたが、黒地に雪輪崩しの大島お召、年の若さに派手な柄も、撫肩の姿をしめて纖りして、八口を透く其の薄紅梅の、枝ならぬ花の袖にはら〳〵と降積るか、と撓弱に見えて嫋娜である。片肱を輕く卓子に掛けて、女中に見向いた顏は、花やかな電燈の下に、やゝ……蒼みを帶びた。

斜に向合つて、書架兼帶の白木の置棚を背にして、洋裝した榮花物語を讀さしたまゝ、頰杖ついた、三十四五の、品よく眉の秀でたのが、溫泉の夜を、廣袖ともなく、平御召に卷着帶で、寬ぎながら、威儀の正しいのは……卽ち(御前)と呼ばれたのである。

女中は支いた手を膝へ引き、

「……それお着き、と申しまして、何でございますよ。私ども番頭たち、ばら〳〵玄關へ、揃つてお出迎ひをいたしますと、丁どあの、篠を突くとか申します大雨に、又激しい電光でございまして、宛然あの(千筋の瀧)が一齊に眞蒼に燃上りましたやうな中へ、(此方樣)がまぶしいやうに、お美しくお立出で遊ばします。……」

實際それは冷艶なものであつた。

「難有う。」と婦人は、やゝさました體に、一寸會釋しつゝ微笑んで云つた。
「否、眞個でございます。然う致しますと、御前、其の直ぐ後へ、あの方でございませう。一所に鳴りました雷樣の音よりか、皆が吃驚したではございませんか。轉がるやうに玄關へお駈込なすつたと思ふと――何處か人の居る所はないか。大勢人の居る所はないか。――ッて、私どもが、其處に居ります頭の上から、がらん堂のやうに、家中を晌して、突然、帳場前を横飛に、あの門の傍に、……内へ入ります取着きに、駕籠屋ですの、車夫でございますの、出入のものの部屋がございます。」
「あゝ。」
と殿は頷いて、をかしく聞惚れたらしく頤に手を添へる。
「ちやうど、簪のやうに、火鉢の火を焚いて居りました、そこへ駈込んで駕籠舁たちの胡坐の間へ、突伏してお了ひなすつたんでございます。すぐに、あゝ、雷樣が嫌ひなんだ、と、氣が付きましてございますけれども、どんなに驚きましてございませう。――何處か人の居る處はないか。――もう、目が据つて、顔色つたらないんでございますもの。」
「然うかい、變つてるね。」と輕く卓子を指で敲いて、
「いや、變つてるね。と云つては濟まないが、然うまで不自由でも氣の毒だね、きぬちやん。」…

……と婦人を見て、
「お前も餘り好きな方ではなかつたつけ。」
「でも、まさか。私は普通ですわ。」
「それだが顏の色が大層惡いよ、蒼いくらゐだよ。」
「夜汽車にめした上、山の中を、お一人で暴風雨にお逢ひ遊ばして、お身體に觸りましたのではございませんか。」
顏の暈りは薄舞の煙の香……黃金煙管を細く吸つて、
「否。」

四

「唯電光で顏を見たばかり、見ず知らずの人を、助けてくれ、と云つたので、自動車の中へ入れたは可いが、大分瘦我慢の女俠だつけな、……實は可恐かつたんだらう。何うかされやしないかと思つて。」
「何うするものですか、……又何うかしようたつてさせやしないわ。第一そんな人相ぢやないんですもの。……でも凄かつたわ、眞蒼になつてるて、雷樣が可恐いんだつて事は、一目で知れて

よ。……」
「貴女、お寒いのではございませんか。ばつたり雷様が止みますと、急に冷く成つて參りましてございますから。……眞個お色艶が。」
「實際、蒼いよ。」
「大體が黑い處へ電光の鍍金をかけた所爲でせうよ。……崖緣の草と一所に身體へ浸透るほど光りましたもの。」
と空色鼠に藤の縫ある半襟に掌を外らして當てて、俯向いて胸を見て、
「遙々推掛けて參つたのが、そんなで濟みませんね。これでも湯へ入れば玉のやうですつてさ。」
「ほんに、早速お召し遊ばしては如何でございます。お心持がさつぱりとなさいませう。」
「入つておいで。」
と卓子に腕を組直して、
「其の内に御馳走が整然と出來ます。」
「ですが、今の人が來ます時、私が居ないぢや、跋を惡がるでせうから、お兄さんにお引合せをして置いて、それからの事にしますわ。」
と優しさが瞳に籠る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo